

サンホーフ

第22回ウェビナー開催

## ウェビナー開催

めて国際競争力を失いつつある。既に農業後進国なりつつのものではと危機感を抱かれていた。日本の農業生産性(収量)が1960年代の栽培法から変わったおらず収量が伸びていないからと各国の単収を比較し指摘。オランダは

て栽培法の改革を行って収量を倍増すべきとした。ただし日本のスマート農業は単にコストの上乗せになつており、収量と利益増加のための導入を懸念すべきと強調。

能であり、日本がやるべきは高収量・高収益・健康的・環境保全への配慮が必要でそのためには各ファクターで精密なインパットが必要だと指摘。農業口 Pratt が実用化されれば大規模栽培でも高収益作物の栽培が可能で、作業体系も変わるた

械で行う。熟練者は1秒間に5個収穫し日本あるアームに農産物を載せ後部で選別。農場も機械化を進め最適な体系になるよう極限まで効率化を追求しているとした。

最後にこうした改革の共同研究に関する国内専力者を募った。

トマトで単収が8倍、つまり8分の1の価格でも利益が上がっており単位面積当たりの効率が良い。その中でイスラエル農業は、試行錯誤を繰り返すことでの単位面積当たりの収量が各作物でトップレベルと話す。

そうした中で日本に必要なのは科学に基づき新しい手法を取り入れたスマート農業で、これを用いて大規模なメリットを活かしながら土地土壤の状況を把握した農業が展開可

ど革命が起つるが、農産物の整備が進まず、環境整備の難易度も高く民間の投資も少ないとした。  
もう一つ必要となるのが経営の改革とし、日本の農家は補助金を抜くこと赤字経営であり、必要なのは「カインセン」と話す。例えばゴミン高原のリソング蘭園は1200むあるが全てドリップが敷設され、収穫は人と自走機